【Zigzag-memo　No14】　対等互啓（恵）の対人関係

私を取り巻く世において、苦海浮世に因縁生起の法則あり、有相無相に因果応報あり、我執常住の浮世、誰にでも、望まない艱難辛苦、四苦八苦が押し寄せて苦しめる。中でも何と言っても対人関係・人間関係が一番のストレスになる。正面突破もあろう、逃げるが勝ちで遠回りもあろう、交差点や分岐点においてどちら行きを選択するのか、その人の自由である。閉鎖性一組織内はともかく一般社会においては人間性の序列はない。一人の個性（人間力量）は、深淵で計量しようが無く、かつ優劣を決めようがない、掴(つか)みようがない。また、その人間の現実の発現性である「心・言・行」、つまり「心（認識や精神）・言（言葉や言語）・行（行動や活動）」はその人間力の一部を一時(いっとき)表現しているに過ぎない。

私が向き合ったら、図(表)－1のように、入り口で、①②の要件は必要なし、そして付き合い・懇談が終わった出口で、ⓐⓑⒸの要件は必要ない。相手に私の考え方を押し付けたり、賛同を求めたり、縛ったりはしない。ただ、お互いの人間性・人生観を交換すればそれで満足である。もちろん、相手方に宣言したりするものではまったくない。私の内心で決意する有り方である。

「親しい」の程度は人によりけりだが、私には世間一般で謂われる親しき友はいない、そのような親しき友を作らない、そのような親しき友は必要ない。今更、腐れ縁やしがらみでがんじがらめの阿諛(あゆ)追従の人生はまっぴら御免だから。

入口で｛①「馬が合う」／②「価値観が合う」｝必要なし、かつ出口で｛ⓐ「納得して貰う」／ⓑ「理解して貰う」／Ⓒ「賛同して貰う」｝必要なし。

図(表)－1

1．「敬」する

私が敬慕・私淑する安岡正篤(まさひろ)先生は「人生の五計」（PHP 文庫その他）において、図(表)－2のように語っています。名文です、もう感動します。

人間と単なる動物とを区別する最も根源的なボーダーライン、境界の大事なものは何か。これを失(な)くすれば、人間は人間の形をした獣になってしまう。これがあることによって、人間が万物の霊長であるという境界を成す大事なものは何かというと「敬」と「恥」であります。愛ではない、愛というものは、発達した動物になるとある程度持っている。「敬」することは、自ら敬し、他人(ひと)を敬するということ。敬という心はより高きもの、偉大なるものに対して生ずる。つまり、人間が進歩向上の心を持っておることだ。進歩向上する人は偉大なる目標に向かって進まんとする。その進歩向上せしめる的になる者に対して、われわれは敬の心を生ずる。敬するということが分からない者には進歩がない、向上がない。敬することによって向上がある。恥ずることによって規律、自ら律するという規律というものがある。

図(表)－2

2．善友と悪友

私は善友を求め、悪友は退ける。

（1）求める善友

対等互啓（恵）を最大限に尊重する人をいう。

人生において内的ストレス蓄積の根源は、何と言っても、人間関係そのものにある。そして、私の対人関係の決定的なキーワードは、相互不可侵、無条件個性尊重、「対等互敬（恵）」である、「互いに尊敬」するという大上段の構えではない、無心・無条件に相手を敬する、敬意を払う関係である、その要件は図(表)－3のとおり、同期同調の要件でもある。

肩書は一組織内の閉鎖空間で通用するもの、デスクに付着しているもの。一般社会においては、選挙権は社会的身分を問わず１人１票ということを例えるが、「そもそも人間性に優劣の序列はないのだ、これは絶対真理なのだ。」このことを大前提にすればこそ「私と貴方は違って当たり前」を認識でき、憎悪の敵対関係は生じないのだ。普通は対等互恵と書くが、私は敬するがあって恵はその後に付く付属物、敬の結果物である、よって、対等互啓（恵）とする。

善友、朋友を求むというものの、私は徒党（グル・ムレ・タマリ）を組まない、結束しない。緩々（ゆるゆる）の知人関係で良いのだ。

❑[a]	お互いの固有の人間性は対等・互角であるとすること。	・何事にも学習意欲のある人 ・好奇心旺盛で向上心のある人 ・真善美を求める人、語れる人 ・実行を生き方の核としている人 ・柔軟思考の人 ・「夢と希望」が薫る人 ・公明正大磊落な人	次頁「マンキタゲ佞奸根性（やきもちねいかん）」が臭わない人
❑[b]	それぞれに一長一短があること――その長所は相互に優劣はないこと、その短所に相互に段階がないこと――を絶対的に認め合うこと。		
❑[c]	お互いに権利・義務において、同等であること。		
❑[d]	対峙の場においては、過去の経歴や今の社会的地位はまったく無関係で、今のそのままの有り様を尊重・尊敬すること。		
❑[e]	相手の思想信条や性格に①ケチを付けないこと、②否定しないこと、③悪評を口にしないこと。		
❑[f]	お互いが攻守（責（せめ）・受（うけ））の肝を教え学び高め合う同格の人間指導員足るを自覚すること。		
❑[g]	相手に同調是非・賛否・白黒の判定を求めない、同調圧力をかけないこと。		
❑[h]	主義主張・思想信条の違いが出て来たら無視する、垂れ流すこと。		

図(表)－３

人間関係協調を成して行くためには、どんな懇談でも、相手に対して賛否を問わない、言いっぱなしを是とすることである。

（2）退ける悪友

還暦を過ぎて、65 歳以上、70 歳を過ぎていい大人になって幾ばくも無い余命になっても、図(表)－4のとおりのどこか胡散臭い人「人的ワースト５」が臭う人とは、やむを得ず接近・接触したら、時候挨拶と面従腹背と馬耳東風で懇切丁寧に応対することにしている。次回からは近付かないことにしている。

どこか胡散臭い人「人的ワースト５」		自己保身・我欲の強い「佞人・奸人・佞奸」 この心理が無意識層で習慣化しているので残滓が満タン
①マンキダゲル人	自分の不甲斐なさに向き合えず、ねたみ・ひがみ・しょねみのやきもちで、相手・他人に難癖・イチャモンを付ける人	
②損得勘定で動く人	地位・名声にしがみ付き何事も損得（私利私欲）の臭う人 自分の持てる知識をもったいぶって出し惜しみする吝嗇屋	
③頭でっかちな人	地球上に 80 億人もいて、上には上がいることが分からない人 取るに足らない知識を自尊心・プライドの盾としている人 新聞・テレビ報道等の話題を取り上げ終始解説者気取りになる人 頑迷固陋、毒牙偏執の人	
④口先と指先で仕切る人	動いている振りをして動かず、巧妙に逃げ回る人 配下の成果・手柄を横取りする性格の人 酒飲み会で「政治・スポーツ・宗教の話をするな」等 “あれはいい、これはダメ”と裁判官風に共有時空を勝手に仕切る人	
⑤権威を笠に着る人	過去の地位・身分や今就いている「何とか長」の力で威嚇する人 デスクに付いたはずの長にしがみつき始終引き摺っている人	
総体した通称は(註 1.2)「マンキタゲ佞奸根性」　（または、毒我ウンコバラマキ野郎）		

図(表)－４

私はこの歳になり、そのような醜い人間には絶対になってはだめだと強く意識し自戒している。このような『人的ワースト５』――仮面を被っている羊頭狗肉の存在は、地域興しや地域コミュニティの発展にとって、「百害あって一利なし」である、したがって、本来はそれらを活動のリーダーにしてはならない。このような性格がリーダーになると、メンバーは委縮して、能力を発揮しない、能力を隠すようになる。如何なる目的の集団であっても「人的ワースト５」の一つでも当てはまる人物が一人でもチームにいると絶対に真理・真相・目的・目標に到達することは出来ない。「人的ワースト５」の性格、自己保身の強いマンキタゲ佞奸野郎は、破壊屋的巧妙な動きをする。チームの中には必ずや見抜く者がいるが、そのような優秀な人は能力を秘匿・抑制することになって声を上げない。日本人は国民性として、善者・善言は引っ込み思案で、悪者・悪言は群れる特質を有するからである。マンキタゲ佞奸の性格は、個的閉鎖社会における病的精神疾患、治癒付加病理現象であると思っている。

ところが、このようなヘボリーダーでなければ、メンバーはお互いに「**譬え、火の中、水の中**」（**不惜身命**）の心が自噴し、貴方のために、みんなのためにという(註 3)寛大三美言が疼き、中空渦巻運動が自発し、伸び伸びと能力を発揮し、「“すっだいごと”運動」は素晴らしい成果を上げるのだ。私の現役時代は上司を見極めて処世したが、「譬え、火の中、水の中」の心が爆発した一人の上司が思い出される。

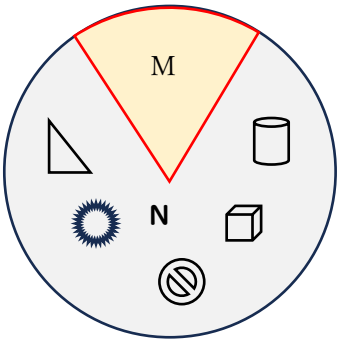
（註１）「マンキダゲル」とは山形県庄内地方の方言の一つで、相手・他人の幸せそうなことに対する羨望の眼差しをいう。それが「ねたみ・ひがみ・しょねみ」の心が醜いやきもちとなってさらに汚泥化・悪情化していくことを指す。

（註２）「佞人・奸人・佞奸」とは、近江聖人と称えられた江戸時代初期の陽明学者、中江藤樹はその著「翁問答」の中で、「虎狼野狐のような邪心をうまく隠して、才知・文学・弁舌で以って君子のように

化けて人をごまかす者」と述べられている。
（註３）山形県西川町の菅野大志町長の口癖「Ⓐ私の仕事じゃないと言わない（それも私の仕事だ）、Ⓑ利他、Ⓒ先回り――」を私が自称していることをいう、寛大は菅大に重ねている。

このように善友とか、悪友とか、分別・選別すること自体、70 年以上の年月を重ねても練れていない私の証拠である、これは自分の素地がそのように求めるので如何ともし難い、今、この歳になって、人生生き方を学べる少数の善友がいればそれで充分、最高の幸せであると強弁している。

（３）偏らないか？
「前善友を求め、後悪友は退ける。」ということは、図(表)－５イメージにおいて、前者はMの領域、後者はＮの領域対応とならないのか？　すなわち、M以外の気に合わない人は排除する、選別することであり、「中（ちゅう）する」（真の調和を求める心・言・行の実践）ことからはかけ離れることになるのではないかと自問する。また、求めた善友を抱えた心の領域Mは極めて限定的になるのではないか、ひいては交友関係だけでは無く、あらゆる「もの・こと」に対する考え方、思想信条が偏ることになるのではないかと自問する。　その上で、陽中陰有り・陰中陽有りの自然原理においてはこの指摘の恐れがあることからは、「交友関係だけの対応視点」と強く意識している。逆に言うと、M以外のＮの領域に私の知らない、私の想像だに出来ない有為な人・稀有な人が沢山居るはずである。後記のレーベ（Lebe）・マイスター（meister）-がそのＮ領域に居るはずという期待と希望は大いに持っている、そういう人を見出し得る可能性が私の眼前に広がっていると考えている、私の人間としての基本的視野は、「彩色性多重人格」「新型風見鶏人（びと）」「Moving oval man（動的楕円形人（びと））」と自称する心模様にあって、見えないが**「天地人貫流ストローポール（芯（しん）軸（心））矢、一気通貫精神的支柱）」が貫中久していることからは、**「善友を求め、悪友は退ける。」の考え方は大局においては私の全人格を限定することにはならないと思っている。



図(表)－５

３．三つ（油水、塩水、砂糖水）の溶液から学ぶ
私の日常の対人関係は、具体的な人付き合いは次の心を以って対応する。“　水と水にあらずに（※1）水と油の如く、砂糖水にあらずに（※2）塩水の如く”の姿勢である。（※1・2）普通の解釈とはちょっと違う。
以下、溶かすというのは貴方と私が何らかの場の同席を意味し、復元というのは別れることを意味する。

（１）私の好まない一見よしの「砂糖水」
“砂糖水の如く”はダメ。個体である砂糖と液体の水を用意し、合わせた砂糖水は、①溶かしたものが水中に「均一に」散らばっている、②透明である、という２条件を満たした水溶液である。次に復元化を試み、見える水を加熱し蒸発させる、結果、炭化した黒褐色のドロッとした状態（カラメル）になり、まったく別の物体に変化するのである。ベトベトする砂糖水は“甘い”味がする。　ところで、余った薬にライター等で火を付けて見てください。ドロドロと真っ黒に炭化する、石油製品（合成化合物）であることが直ぐ分かる、やたらと口には入れる気がしなくなる。
（２）私の好む処
その１；**“水と油の如く”**

水と油は、混ざらない（溶け合わない）上に、軽い油分は上に水は下に、２層化する。娑婆・浮世の人間界では、普通常識では、対人関係の比喩として“水と油の如く”と言う場合は、犬猿の仲にも似て合わない、反発し合って仲が悪い関係として使う。

しかし、私は別の解釈である。一目、見た目は、両方が混ざり合っているが、真相は溶け合っていない。外部擾乱を加えられたとしても一時はゆらぐが２層化（同置化）は崩れない。持ち場・立場を住み分けし、居所に相手は障害を与えない、相互不可侵である。伸縮自在の距離間隔調節器の投射である。

「　水と油は違うもの　しかし、同器（どうき）に一緒成る　」対等互恵（敬）の精神に繋がる。

その２；**“塩水の如く”**

固体である塩と液体の水を用意し合わせて塩水を作る、そこ後、水を加熱・蒸発させる、結果して、サラサラとした白い塩の結晶が残る（復元する）。それも大きさがみな違う。砂糖も塩も見た処は、共通して白いものだが、塩水は“辛い”味がし、擬人化すれば、溶け合ったように見えても、その実、自尊独立の個性を失っていないのだ。

４．本当の切磋琢磨

人間関係の一つに誰もが使う「切磋琢磨」の精神である。危惧するのはこれを美名として弄（もてあそ）び妥協と打算でその場を繕うというようなことにしていないかということである。心の底から思想信条を語り合う、その中に生じるその違いを丸ごと是とし、乖離を埋める必要は無いのだとする許容度を持つことである。前出安岡さんにより教わったが、荘子の言葉に「新発硎（はっけい）」という言葉がある「新たに硎（けい）（砥石）より発す」といい、錆付き切れなくなった刃物を砥石で磨いて再生し、再び切れ味鋭いものにすることをいう、人に譬えれば、「相互新発硎（はっけい）」の心の融通を許せるか否かである。このような場では「政治・スポーツ・宗教」の話をするなどと裁判官風の者もいるが、本当の新発硎（はっけい）とか切磋琢磨を実行すればそこ（政治・宗教）に行き着く、そういう話題に対して客観性を以って堂々としゃべれないから逃げる策なのである。私の意図は知識をひけらかす場を指すのではない、「政治・スポーツ・宗教」は実に身近なものではあることからは、良心・良知、道徳・倫理に触れて来るものとなる、そうすると、その人の理想精神の有りや否やが明瞭になって来る、すると日常生活の向きが露呈して来る、すると、覗かれたという被害妄想に駆られるから避けたがるのだ。私は、古賢先哲の名を借りるまでもなく、真の新発硎（はっけい）・切磋琢磨を通して、お互いに高め合う人間関係でありたい。特に酒飲みの場で、その場しのぎの因循姑息な世間話の始終はつまらない。**お互いに裸心（はだかこころ）（らしん）を曝（さら）け出せばこそ互いに人生の良き羅針盤が立つ**というものである。それらの言葉の意義は“磨き合う”だから、つまり、付着した・沈殿した、腐敗堆積した心の汚れを削って落とし合うのである、生半可なもので落とせない。陽明学の王陽明は「**山中の賊を破るは易く心中の賊を破るは難し**」と名句を吐いている。その心中の賊を剋し合う武器は何かである。学者風の難しい知識はいらない、お互いに素（す）の心があればいいのだ、正徳充満の裸の心だ、赤心だ、お互いにまさに一物の無い虚心坦懐になればこそ、個性相互尊重の心が生まれるのだ。しかし、誰か一人の心底に利害損得・打算・保身のマンキタ（やきもち）ゲ佞奸根性がざわついた瞬間に場は自然崩壊する。そんな場で、共存共栄・共生とか、絆などの美名を持ち出した処でまったく意味をなさないのだ。

「量と質」というが、量、すなわち、身長とか体重とかに長短軽重あって、顔かたちに大小が生じるという面においては比較出来ると言えるかもしれないが、質、すなわち、思想信条の違いの優劣を量り様がないのである、ところが、自分尺度の好き嫌いを以って、相手を指摘するものだから必ずや喧嘩に至るのだ。

ところで、以下のことが今でもはっきりと覚えている、このような人とは生きている方向が違うので以

後近付いていない。

その１；町内会行事に係るある懇親会（酒席）の帰り道（３人）で、A氏曰く「俺と友達になれや、深い関係の付き合いするべ！・・」　私は「友達になるとか、深い付き合いとかというが、そんな関係になるかどうかは結果ではないか・・」と言ったら彼は切れた風に「俺の言うことを聞けないのか、俺には色んな人が（頬に指を当て斜め切りした）いるぜ　・・」と話されたので応えず「ジャアネー」で別れた。

その２；３人のある懇談の中で、B氏曰く「俺はあなたとは深い関係になりたいけどなれないかなあ・・」　私は「深い付き合いとは具体的にどんな状況なのか？」と尋ねたら、即答無し、ややして「困った時に助けてくれる人・・。」友人になるとかならないとかは、予め宣言するものではなく、それは日常交友の積み重ねの結果次第でないのか？と言った。

還暦を過ぎていい歳になってもこのとおりの不思議な人種。人間関係において、対等互啓（恵)、肝胆相照らす、啐啄同機（そったくどうき）、切磋琢磨の妙を感じない人には接近しないことにしている。

５．Ｐ－Ｄ－Ｃ

2024(R6)年 8 月 28 日に開催されたパリ・パラリンピック開会式のスローガン（キャッチフレーズ）は「パラドックス（逆説)、ディスコード（不和）からコンコルド（調和）へ」(Paradoxes、Discord、Concorde）と題されたということです、対人関係に当て、逆に言うと、「不和および逆説」を丸々相互尊重する・互敬するからこそに対立が解消された「調和」を生む、調和が生まれる、自発するというのです、私はこのような思想に感服・感涙します。　別の言い方をするが、丸々対等互啓（恵）の精神が心底から湧かない性格、つまり、前記「マンキタゲ（やきもちねいかん）佞奸根性」の人間が入ると、このロジックは通用しないので「コンコルド（調和)」は生まれないことになる。

****

お互いが思想信条、生き方の総てが「違う人・異なる者」の間柄において、お互いが異質性を丸々認め合うことこそに共存共栄を齎し、そして、共生社会に見えざる力で貢献することになると思う。

最後に、前出安岡正篤（まさひろ）先生からまたいい言葉を教えて貰った。

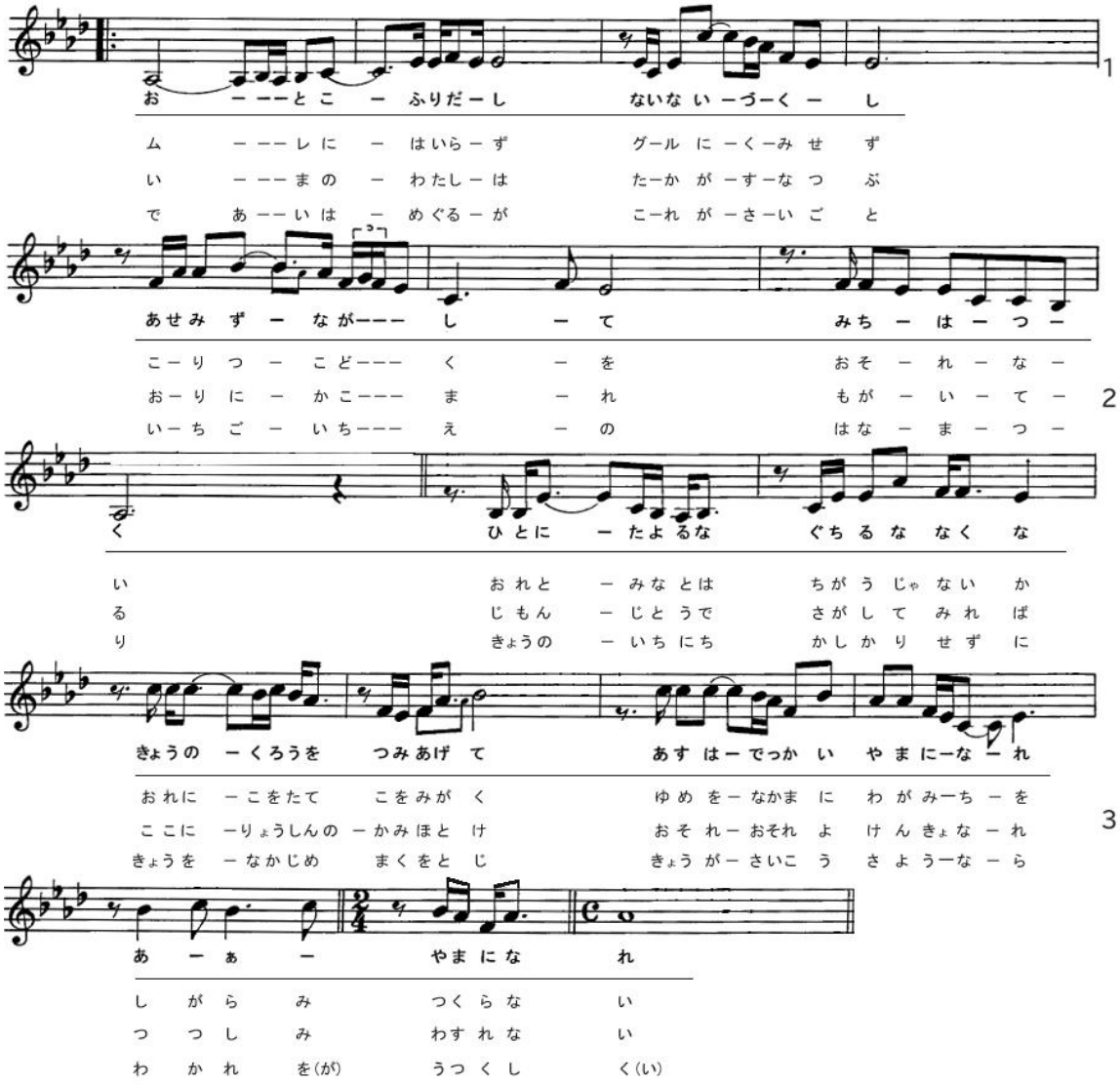
レーゼ・マイスターLese-meister よりも、レーベ・マイスターLebe-meister を求めよとおっしゃられている。　両者はドイツ語で、前者は教科書を教える教師、つまり知識・技術を教えてくれる先生を指すが、今更私の求めざる処である、様々な知（？）の似（？）非（？）巨（？）人（じん）にも向き合って来たが、みな自慢オバレードで学びの糞の役にも立たなかった。　後者は人間をつくる先生、つまり人の生き方を導く師・道徳の師を指す。私は 75 歳を過ぎては、心の修養に刺激を賜りたく**「Mein Lebe-meister（私の人生の師、私の生命の師)」を求め続けたい。**

****

以上の気持ちを自由詩にして次頁のとおりの替え歌にしてみた。

K07　大香(わたくし)のこの歳の生き方

［原曲「大志（こころざし）」の替え歌］



※1；五線譜直下の歌詞は、原曲－（歌唱；坂本冬美／作詞；たかたかし／作曲；市川昭介）の1番目の歌詞
※2；替え歌の詩は大沼香作　2018(H30)年6月30日（土）

1．群れ(ムレ)に入らず　（グループ）に組みせず
孤立・孤独を　恐れない
俺と皆(みな)とは　違うじゃないか
俺に“独(こ)”を立て　“個(こ)”を磨く
夢を仲間に　吾が道を
しがらみ　－　作らない

2．今の私は　たかが砂粒
檻(おり)に囲まれ　もがいてる
自問自答で　探して見れば
ここに両親(良心)(真我)の神(かみ)・仏(ほとけ)
畏(おそ)れ畏(おそ)れよ　謙虚なれ
慎(つつし)み　－　忘れない

3．出会いは巡るが　これが最後と
一期一会の　華(はな)祭り
今日の一日　貸し借りせずに
今日を中締め　幕を閉じ
今日が最高　さようなら
別れを（が）　－　美しく（い）

（end）